

■言語文化

次の「蕭史と弄玉」（『唐物語』）は、「蕭史」（『列仙伝』）の翻案として書かれた作品である。二つの文章を読み、後の問いに答えよ。

蕭史と弄玉 『唐物語』

昔、秦穆公の娘に弄玉と申す人ありけり。秋の月のさやけく隈なきに、心を澄まして、またく世のことにほだされず。また、蕭史といふ楽人あり。秋月清くすさまじきあけぼのに簫を吹く声、あはれにかなしきこと限りなし。弄玉、それにや心を移しけむ、進みてあひたまひにけり。世の人あさましきことに思ひ、そしりけれど、いかにも苦しとおぼえず、ただもるともに台の上にて、簫を吹き、月をのみ眺めたまふこと二心なし。鳳凰といふ鳥、飛び来たりてなむこれを聞きける。月やうやく西に傾きて、山の端近くなるほどに、心やいさぎよかりけむ、この鳥、蕭史・弄玉二人の人を具して、むなしき空に飛び上がりぬ。

類ひなく月に心を澄ましつつ雲に入りにし人もありけり

むなしき空に立ち上るばかり心の澄みけむも、ためしなくぞ。また、簫の声にめでて、人のあざけりを忘れたまひけむも、好ける御心のほど推し量られていといみじ。

蕭史『列仙伝』

蕭史者、秦穆公時人也。善吹簫、能致孔雀・白鶴於庭。穆公有女、字弄玉、好之。公遂以女妻焉。日教弄玉作鳳鳴。居數年、吹似鳳聲。鳳凰來止其屋。公為作鳳台、夫婦止其上、不下數年。一日、皆隨鳳凰飛去。故秦人為作鳳女祠於雍宮中。時有簫聲而已。

秦穆公：春秋時代の秦の君主（在位 前五九〇前六二〇）。

蕭史：本話のもととなった『列仙伝』では、「蕭史」と表記されている。

簫：長短の管を並べて造られた竹製の管楽器。

台：高く築かれた建物。楼台。

鳳凰：古代中国の想像上のめでたい鳥。徳の高い天子が出現する時、世に現れるという。

むなしき空：大空・虚空。

鳳台：土で造った高台の上に楼を建て、それを「鳳台」といっている。

雍宮：雍（今の陝西省鳳翔県）に建てられた秦の宮殿。

列仙伝：二巻、神仙の伝記集。前漢の劉向（前七七〜前六〇）の撰と伝えられてきたが、現在は後人の作と考えられている。現行本では七十人の神仙の伝記を収める。

授業でAさんたちは、「蕭史と弄玉」（『唐物語』）の（作者の製作意図やねらい・テーマ）を根拠を示してまとめ、発表することになりました。以下の会話は、グループ討議の内容です。会話内にある①②③④⑤⑥⑦⑧⑨に入る表現を、それぞれの指示に従い、答えなさい。（★のついた空欄は抜き出し問題ではないので注意すること）

①	結婚の仕方
②	風景描写の有無
③	鳳凰と飛び去った後の描写の有無
④	簫史の音楽の技術
⑤	「心」の有無
⑥	和歌の有無
⑦	鳳凰が来る時の状況
⑧	弄玉の性格の描写
⑨	二人の、鳳凰との飛び去り方

A—今回の話し合いのゴールは（作者の製作意図やねらい・テーマ）をまとめることだよ。まずは何からはじめようか。
B—前に授業で『羅生門』と『今昔物語集』の表現の違いから芥川龍之介の描きたかったテーマについて考える授業を受けたよね。あの時も原作古文と『羅生門』の比較からはじめたから今回もこの二作品の比較からはじめたらどうだろう。
A—それなら、それぞれ読み取った二作品の違いを付箋に書いて、出し合ってみようか。

A—いろいろと違いが挙がったね。これらをグループピングして整理する必要があるね。振り分けてみようか。
B—ストーリーに関するものでは、①や鳳凰が関係する③④⑤⑥⑦⑧がまとめられるかな。
C—「蕭史と弄玉」だけに描かれていることでは、②⑤⑥⑧がひとくくりだね。
A—これらを中心に考えていこうか。どの違いからでもいいから、意見を出してください。

D—まず①「結婚の仕方」については、「蕭史」では父である穆公が娘の弄玉を蕭史に嫁がせているけど、「蕭史と弄玉」ではそうではないよね。
C—それについては、「蕭史と弄玉」では①抜き出し（十一文字）と表現されているから、違いとして挙げていいね。

B—そう、「蕭史と弄玉」では、弄玉は積極的なんだよね。
A—③でも挙がっているように、性格の描写も追加されているね。弄玉はこの結婚に対しても「世の人あさましきことに思ひ、そしりけれど、いかにも苦しとおぼえず」②★【口語訳】と表現されている。この弄玉の周囲を気にしない性格に関する描写は他にもいくつかあつて、まず③抜き出し（十三文字）と描かれているよね。

C—秦の穆公という高貴な人の娘なのに、「世の人あさましきことに思ひ、そしりけれど、いかにも苦しとおぼえず」や③のように、世間の目を気にしないなんて、すごく俗世を超越した人物像に書き換えられている、ということだね。
B—作者のねらいを考えるきっかけになるかもね。次はどの違いについて考えようか。

C—⑤にあるように、結末も確かに違うよね。鳳凰と飛び去った後、「蕭史」では弄玉のために祠が建てられ、祭られているのに対して「蕭史と弄玉」ではその後の描写がない。何か理由があるのかな。

A—「蕭史」の最後で、「祠から「時々有簫声而已」④★【書き下し文】とあるのは、何を表しているのかな。
B—「蕭史」が収められている『列仙伝』は、注釈に（神仙の伝記集（七十人の神仙の伝記を収める）とあるよね。つまり「時々有簫声而已」は、蕭史と弄玉が神様になったということじゃないかな。そもそも④にもあるように、簫の音色で孔雀や白鶴、ましてや鳳凰まで呼び

寄せる訳だから、人間離れしている神仙の要素はあるよね。

C—まずは、「蕭史」では「神仙化」というテーマを描いていることが掴めたね。

D—そして「蕭史と弄玉」ではその結末が削られていることから考えて、「神仙化」という主題を意図的に外した、と言っているのかもね。

A—⑨にある鳳凰が二人を連れて飛び去った理由は、「蕭史」では⑦にもあるように、鳳凰を呼び寄せているのに対して「蕭史と弄玉」では、鳳凰からやってきていて、その理由について作者は⑤抜き出し(十文字)と述べている。

B—つまり、鳳凰が二人を連れて飛び去った理由には、蕭史や弄玉の「心」が関係してることだよ。

C—付箋の中にも⑤に「心」の有無が挙がっているから、それについて考えてみようか。

D—僕も「心」の表現が気になっていて、全部抜き出してみたんだよ。全部で7カ所あった。この7カ所の「心」のうち、「澄む」と一緒に出てくる箇所が3カ所あって、これって弄玉の、または蕭史や弄玉の「心」だよ。

B—「いさぎよし」も(清らかだ・汚れない・潔白だ)の意味だから、「澄む」と同義だね。ということも4箇所だ。

D—つまり、「蕭史と弄玉」では、清らかで澄んだ心の弄玉だからこそ、蕭史とともに鳳凰が「むなしき空」へ連れ去ったということだね。

A—そうだね、神聖な鳳凰が連れ去り、昇天するほどの清らかな「心」を描きたかったということだね。

C—D君の話していた「心」の描写をよく見てみると、②でも挙がっている、「月」などの風景描写と関係がありそうだね。

A—そうだね。月を見て心清らかになっている描写だよ。

D—そしてこれらの「心」の多くは弄玉の「心」を表しているけど、二番目に出てくる「心」は、弄玉が蕭史の⑥抜き出し(五文字)に惹かれた、ということの意味している。

C—月に音楽。ここから弄玉の⑦★(漢字二文字)「心」と読み取ることができないかな。

B—そうだね。音楽や風物に没頭していたことは⑧抜き出し(二十文字)に端的に表現されているから、⑦心を表したかったのは間違いないさそうだね。⑥の和歌も、⑦心の象徴ともいえるものだしね。これが主題なんじゃない？

C—ちよつと待って。今の議題から⑦心が主題というのとはわかるけど、弄玉の性格・人物像と⑦心が繋がるかな？

D—周囲の目を気にしない、俗世を超越しているというものは、その分、月や音楽に没頭していたということではないのかな。世間のことには頓着せず、純粹に風物や音楽に没頭する姿を描き、そういう人物設定にすることで、弄玉の⑦心を際立たせる意味があるのかもね。

B—そう解釈すると、人物設定の理由も⑦心に繋がるね。うん、⑦心が「蕭史と弄玉」の主題ということでもまとめよう。

C—舞台は中国のままなのに、そこに日本らしさを加えたことが、この翻案の目的かもしれないね。

A—これまでの議論で、この班の読み取った「蕭史と弄玉」のテーマは⑦心のすばらしさを伝えるという方向で定まったね。最後にまとめるに当たって、他に確認しておくことが①から⑨以外でないかな。

B—⑨★(一行)については調べておこうか。

C—そうだね。「蕭史」の方も確認したから、「蕭史と弄玉」の方も確認しておいた方がいいね。テーマに関することが何か分かるかもしれない。この一つの文章だけでは分からないこともあるからね。

Aさんたちはその後、話し合いの様子を側で聞いていた先生に、意見を求めたところ、次のようなアドバイスを受けました。

【先生からのアドバイス】

①『羅生門』の授業を思い出して、違いを付箋に書いて出し合う方法は、いい整理に繋がった方法である。

②話し合いの最後に挙げた⑨は、時代背景や他の挿話の主題などを知ることが繋がる。非常に重要な作業。

③分析をする際、根拠箇所の抜き出しは、余すことなく抜き出した上で、分析した方が良い。

(自分たちに都合のいい情報だけを集めては、誤った結論に向かう可能性がある)

④『徒然草』などでも(主題・テーマ(教訓))は最終段落にあることが多い。もつと注目してみようか。

(班の結論である⑦が正しいのかどうかの検証にも繋がるのではないか)

⑤追記された「月」の効果・働きについて、議論を深めてもおもしろい。ぜひ挑戦してみよう。

先生からのアドバイスとAさんたちの話し合いの内容を読み、次の問いに答えなさい。

問1 アドバイス②を踏まえると、Aさんたちの議論の中で、⑧「弄玉の性格の描写」について、②と③を挙げて議論しているが、全てを抜き出してはいない。②・③と⑧の関連性はまだ抜き出していない箇所を本文中から十五字以内で抜き出せ。

問2 アドバイス④を受け、作者が弄玉について賞賛しているものは何であると言えるか。和歌以降の本文を読み、過不足なく簡潔に答えよ。

問3 アドバイス⑥を受け、Aさんたちは、本文中に5カ所ある「月」の働きを、分担してまとめてくることにした。次の選択肢はそれぞれが次の授業時間に持ち寄った分析である。この中で誤っているものを一つ選び、記号で答えよ。

- A 「秋の月のさやく限なきに」は、弄玉の⑦心を表すための対象として用いられ、弄玉の清らかで澄んだ心が、曇りのない純粋なものであることを想起させる働きがある。
- B 「秋月清くすさまじきあけぼの」は、蕭史の吹く簫の音色が、美しくも切なく響いていることを強調する効果があり、「月」と「音楽」を並べることで、⑦心を読者に示す効果がある。
- C 「簫を吹き、月をのみ眺めたまふこと」は、俗世を超越し、⑦に没頭する二人だけの世界を、「月」と「音楽」を並べて描くことで読者に印象づける効果がある。
- D 「月やうやく西に傾きて」は、「あけぼの」の「月」が「西」に沈む描写によって、結婚から鳳凰と共に昇天するまで⑦に没頭した二人の一日の時間の経過を示す働きがある。
- E 「類ひなく月に心を澄ましつ」は、話の内容を総括した作者の和歌中で用いられており、主題である弄玉の澄んだ心を端的に表現するために、⑦の象徴として「月」を用いている。

問4 これまでの議論・アドバイスを踏まえ、あなたはどのような発表原稿を作りますか。発表原稿の要旨を、以下の条件を踏まえて答えよ。

- I 書き出しに、あなたの考える(作者の製作意図やねらい・テーマ)を一文で述べること。
- II その後、Iのように読み取った根拠を最低2つは挙げること。(文の数は指定しない。)
- III 最後に、⑦作者がIのような(意図・テーマ)にした理由、④Iのような(意図・テーマ)にすることで得られる効果、のいずれかについて、あなたの考えを述べること。
- IV 発表原稿の要旨であるので、会話体で書く必要はない。
- V I~IVを踏まえ、百五十文字以上二百文字以内で答えよ。

